

廣木文藏先生二百六十年祭講話

# 「廣木忠信を祭る文」に学ぶ

日時 平成二年九月二十九日  
会場 揖斐川町 長源寺  
講師 京都産業大学教授 所功 先生

廣木文藏先生二百六十年祭講話

平成二年九月二十九日 揖斐川町 長源寺  
京都産業大学教授 所功 先生

「廣木忠信を祭る文」に学ぶ

わが揖斐川町出身の廣木忠信(通称文藏)は、初め淺見桐香先生に学びました。その淺見桐香の先師が、山崎闇斎先生であります。

江戸時代の学問といえば、主流が儒学、とりわけ朱子学にあつたことはご存知のとおりであります。その儒学、朱子学は、申すまでもなく支那即ち中國に起り、日本へ伝わつた学問です。それゆゑに儒学、朱子学を奉ずる人の中には、中國こそが世界の文化的な中心であり、思想の最高峰と信じこみ、日本などは遅れたつまらない國だと考ふる傾向が少なくありませんでした。

けれども、だんだん儒学、朱子学を究めてゆけば、それそれの國にそれそれ優れた文化、思想があり、そのおかげで今日の自分らも有りうるのだ、ということに気づきます。そして日本人は、日本の先人が究められた道を明らかにし、それを踏み行くことこそ、儒学の真髓を實踐する事になるのだ、という考えが現れます。

江戸前期に、平らいう日本的な儒学を採り進められた方々が、後人が出てまいります。その中で最

もすべし、彼世に最も大きな影響を与えられたのが、山崎闇斎先生であらうかと存じます。そしてその学問を承けられた方々、いわゆる時門の學者は、たくさんおられます。そのなかでも重要なひとりが淡見綱斎先生であり、もう一人が若林強斎先生であり、この両先生に準はれたのが、わが廣木忠愷にほかなりません。

年譜をご覧いただきましたと、淡見綱斎先生の代叙的な著述が『増訂遺言』というものであります。これは貞享元年（一六八四年）に着手され、翌年に出来上がっております。この『増訂遺言』という書物には、支那中國の聖賢教士をあげられておられますけれども、そこで云おうとしておられる半は、それに相當するそれ以上の方が日本におられ、その人々の非常な働きによって日本の歴史、とりわけ皇室を中心とする國體が守られて来たんだ、ということあります。

江戸時代には、やはり幕府が絶大な力をもっておりますから、忠と言えは幕府に忠告を尽くすことだという考え方が一般的でした。そういう中で、日本人としては、天皇を中心にして天皇を仰いで進むことこそ本當の志節だと考へる人が現れます。しかし、それをあからさまに言う方はははかられたので、淡見綱斎先生の場合も、『増訂遺言』には、支那中國を例にとつて書かれたわけです。しかも、その御講義で説かれましたのは、日本史上に類く聖賢教士たちの半續であります。

ちなみに、この当時、幕府に最も近い御三張でありながら、皇室を中心とする國體の歴史を明らかにし、それを後世に伝えようとしたのが、水戸の徳川齊昭公であります。光圀という方は、「水戸黄門

漫遊記」で広く知られていますが、あのように隱居の身で天下を凌駕して覇を飾らしめ奉を勧めた、  
というの、明治以降に作られた構構にすぎません。本當に大きな働きをなさした水戸藩内  
をよく治められた名君としての一面もありますが、さらに大きいのは自ら學問を修め、沢山の書物を  
作られたということであります。

一番著名なものは、『大日本史』という一大歴史書です。これは支那に『史記』があり、あるいは『漢書』以下の歴代正史があるけれども、日本では、奈良、平安前期に六國史が作られながら、以後正史が途絶えてしまいました。そこで、日本本来の姿を明らかにするために、水戸藩の財を傾けて作られたのが『大日本史』であります。これが完成するのは、水戸公が在世中どころか、延々と続きまして、明治三十九年（一九〇六年）によりやく完成を見た、おそらく空前絶後の書物であります。

もう一つ、光圀の命により編纂された『礼儀類聚』という書物が、全部で五十五巻あります。これは、朝廷の平中行事、あるいは御即位札や大嘗祭のような儀式が、古來どのように行われてきたかを明らかにするため、平安時代から室町時代までの公家日記を抜き書きされたものであります。これも大書な書物であり、水戸公の在世中に区區出来上がり、まもなく幕府と朝廷に献上されていきます。たとえば、天皇の代替りに行われる大嘗祭は、醍醐時代から二〇年以上途絶えておりましたが、その復興にあつてこの『礼儀類聚』が大復讐立、たといわれております。

そういうわけで、儒學・朱子學を中心とする學問が盛んになると、だんだん日本的な儒學、日本的

空室も芽生え始めました。その頃にそのような情勢を作り出し、それに大きく貢献されたのが、

山崎闇斎先生であり、その学統につながる人々であります。

しかも、その「学問」がこの異説にも伝わってまいりましたのは、元禄から宝永、さらに正徳から享

保にかけてのころです。とくに西暦一七〇五年の宝永二年、まだ二十七歳の若林強斎先生が初めて其

説にこられた。その後も、しばしばこの説が、とりわけ本州北方を中心にご指導くださったのであ

ります。その頃という概統が、この撰述に生み出された廣本文蔵が、この若林強斎の学問に触れ、

上家して入門しているのです。

長らく岐阜県の柳土史を研究してこられた吉岡健先生によりまして、若林強斎と廣本文蔵との関係

が記された上、環かられる最初は、宝永六年（一七〇九年）のことです。この時に『孟子浩然亭撰』

という書物を廣本文蔵が書写しています。

廣本文蔵という方は、何處で亡くなったか判りませんが、吉岡先生の撰述によれば、四十年代

平ばかりかどみられます。しかも、この度、水谷準一さんからお示し頂きました記録によりま

すと、四十三歳で亡くなっており、そこで遊學しますと、宝永六年に二十二歳ですから、おそらく

二十歳前後で淡見綱斎先生に入門されたのでありましょ。しかし、まもなく綱斎先生が亡くなってし

まいますと、兄弟子である若林強斎先生に改めて入門する子になりました。尚、若林強斎先生の門人

録によりまして、この異説からも「所存内」など何人の方が入門しておられます。

さて、このように初め淡見綱斎先生に、まもなく若林強斎先生に教えを受けられた廣本文蔵という

方は、いったいどのような学問をされたのでしょうか。この点も吉岡先生によれば、『強斎先生遺草』

とが『強斎先生遺草』などに断片的な消息が伝わっております。それらを見ますと、廣本文蔵は先

生から信頼され、非常に苦心をして学問を伸ばされた字がだんだんにわかってまいりました。詳しくは

吉岡先生の『山崎闇斎と異説の門流』という書物を読んで頂きたいと思ひます。

この廣本文蔵が亡くなったのは、享保十五年（一七三〇年）秋八月つまり今から二六〇年前の旧曆

八月十八日、折居に直せば今日九月二十九日です。この「八月十八日」が命日だということは、吉

岡先生がこちらの長源寺で通志帳から見つけられて明らかになりました。その詳細が京都に伝えられ、

望梅軒という塾でお祭りをなさったのが八月の晦、そこで読みあけられた祭文が現存しております。

これからそれを皆さんと一緒に拝読したいと思います。

「若林強斎（若林強斎先生）、弟友（弟子のこと）を弟友、友達といっておられます。弟友と共に酒や

お茶を座して、香をたき、今は亡き廣本文蔵の靈に捧げる。」

述かにその靈を偲びながら、この祭文をささげられたのです。

「賢何乎遂に余を捐て避ける。あ、哀しいかな」

本當に頼みとしてお、たお前が、何て先に逃、てしまったのか、と嘆いておられます。

「昔は賢、桐斎先生の門に遊ぶ」

先ほど申しました通り、忠信は初め桐斎先生に入門したのです。

「未だいくばくならざるに、先生教を賜へたまふ」

要を賜へるとは、亡くなることです。

「則ち又師とせずして来りて余に就いて学ぶ」

桐斎先生が亡くなった後、あらためて夏弟弟子である私のもとで学ぶようになった。

「則ち又植字に硯席を同じうし、互に辭林を執ること、ほとんど九年なり」

一緒に筆の紙を食べ、互いに苦勞しながら九年間勉學をしてきました。

「夏扇がす、冬窓に近づかず」

今は、夏になればクーラーをつけ、冬になれば暖房しますが、拙斎先生の塾においては、夏も扇がす、冬でも窓に近づかず、暑い寒いもほとんど気にすることがなかった。

「飯糰野毛、日を合せて食ふ者、時にこれ有り、賢、少しも屈せず」

その上、食べるものにもこと欠いて、朝食と昼を一緒にするとか、時には食べないこともあったが、それでも忠信は厭うることがなかった。

「ますます勉め、ますます勤む、而して余も亦た依れり」

そういう状況でも、ますます刻苦勤励し新進する忠信を見て、この人ならばと自分も頼りにし

てきた。

「雪の朝、月の夕、相子に茶を淹、酒を暖め、極を憐し教を論じ、今を想しみ古を慕ひ、憤歎慷慨、心脚を傾け過し、相資むるに死生を以てす」

つまり、先生も弟子も大抵お酒が好きで、雪が降れば雪見をしながら、月が出れば月見をし

ながら、共に茶を淹たり酒を暖めて、それと古典を研究し議論してきた。こう云う真しい中

も風流を解する余裕があります。そこで話し合われた事は、「今を想しむ、古を慕ふ」とい

今を想しむというのは、幕府が権力を持ち階級制度してあるが、こんなことではだめだと嘆

息、古を慕うというのは、歴史をひも解いてみれば、日本人は昔から聖徳を中心にして和風獨

り、古を慕うてきたてはないかというわけです。

このように現状を批判しながら、今後どうしたら良いのかを話し合い実践しようとするれば

「相資むるに死生を以てす」

命がけで本當の學問を究めなければならぬ、と覚悟しておられたのです。

「その後、母の側に人なきを以て脚に痺り、且つ醫を索して、以て養ひを為せり。因よりその志に

あらずと雖ども、固も己志を捨ざるもの有り。」

しかし、その後播磨におられるお母さんをお世話する人がいないので、忠信はどうしても細

里へ帰らなければならぬことになり、家類からこちらへ帰って、醫者をしながらお母さんに奉

空を展ぐされた。当時、醫學といへば漢方医下でありましたから、特に医師の修行を欲まなくとも、漢文が読めれば、薬劑を調合することができたのであります。忠信も嶺門の字を究める傍ら、醫業の知識を身につけ、こちらに轉じて醫をやりわいとしていたのです。しかし、心は京都にあ

り、さらに嶺門の字を深めたいと思つておられたにちがいありません。

「然れども江・漢の地接して遠からず、こゝを以て余位がざれば則ち賢衆り、賢衆らざれば余位き、

相違ふこと測からず」

若林聖孝先生はもとと近江にゆかりのある方です。出身地は今の大友大社あたりでした。京

都からこちらへ修業に出でこられる手があった。そこで、忠信はこの揖狭からその大友大社あた

りへ出向くこともあつたのです。

「而して書讀の通阿もた候からず」

また念ふければ乎紙の送り取りをして、学問するることができた。何かお訊ねすれば、その手

紙の行間や余白に答えを書いて返して下さるようなやりとり、これを「問目」と申します。

そのようなことを繰り返してやつておられたわけです。

「則ち相勉め相資むること、昔日に異ならず」

だから、かつて一緒に京都で字んだ時期と同じように、時々近江で會つたり、またはしばし乎紙

をやり取りして学問を続けることができたのです。

「比年来、余疾にかる」

ところで、若林聖孝先生は体が丈夫でなかつたらしく、病氣にかかられた。

「余病に預へらく、余の疾、輕からず。賢を招いて高宮に居らしめ、余の後字を屬せば、則ち余も亦

た遺恨なからんと」

そこで、聖孝先生としては、こう思われました。私の病氣は軽くないので、教のことも考へな

ければいけない。その時には、大友大社の近くにありました高宮の藝を、この大友大社に任せ

られたら安心だと考へた。そして、去年の秋からその半を伝えようとしたのですが、なかなか

が果たせなかつた。今年の春も果たせなかつた。だから今年の秋にはまた高宮へ行くので、その

時に出會つて氣持を伝えようと思つておられた。ところが、その矢先に、大友大社がなくなつ

たという報に接するに至り、まことに對症に耐えない、と嘆いておられます。

「賢の人とあり、忠直にして字情に迷なり」

賢とはあなた、大友大社の人柄は、忠直にして字情に疎い、まさに學問一筋で世情には疎い、

しかも、身なりとが体裁どが、いふものには無頓着であつて、むしろ外見を飾るようなことが嫌い

「いはゆる剛毅本調、仁に近しとは、蓋し此の如きが」

剛毅本調、仁に近しとは、孔子のいわれた一つの理想的人間像ですが、廣木忠信はまさにそれだと進啓先生も言われるほどの方だったのです。

「其の字たるや、名刺を求めず、文辭を求とせず、ただ教を是れ辭じ、いはゆる己の爲にするの字とは、蓋し此の如きが」

字調をしますと、今でも字調を手段として自分の名を上げようとが、利達を得ようとする人が少なくありません。しかし忠信にはそういうことが全くない。まさに何が正しいのか何をなさねばならないことなのかというこのみを考えて字調をしたから、これこそ真の意味で己のための字調を修めて自分を高め、世のため人のために尽くす字のみを考えてきたというわけ

です。

「若し大れ感懐管漢、蓋を擧げて能歌し、死生利害を顧みざる気性は、則ち實に古人激烈の風あり」

進啓先生も廣木忠信と共に酒を飲んだり語り語りして、既の底から暑気がわいて、互いに笑うところ多か。た。忠信には、まさしく真に古人激烈の風がみなぎっていた。だから、兄弟子である進啓先生も本当に心をゆるし、さらに敬字を託そうとしておられたわけです。

以上、大急ぎで廣木忠信という方が、どんなに優れた方であつたかということも申し上げて参りました。一番大字なことはこの祭文に書いて尽くされています。この祭文を深く味わう字が、廣木忠信を

理解し、かつまた時門の神祖を尊ぶことになると思います。

なお、この祭文を書かれた時門学の研究を大成されたのが、東京の進啓先生と地元の高岡進啓先生であり、その御著書は当地の回書館にも寄贈してありますので、ぜひ一覽いただけたらと存じます。

※ 進啓先生『若林進啓の研究』(神道史学会 昭和五十四年刊)

※ 高岡進啓先生『山崎闇斎美談の四の門流』(岐阜郷土出版社 平成二年刊)

韓子林氏秋八月  
 桂林也與培友謹  
 真酒家野夫未忘  
 之靈狂香空行欲  
 仙遊招京中進有  
 交感者賢進其  
 細金華之門未幾  
 老主君贊則之不  
 許來就才余亦  
 典用規者主操  
 子竟致九年矣  
 甚不肖身不進  
 蟻踪野帝念  
 非余若姑子之  
 噴之令蓋物益  
 願而余亦依人音  
 月名相與淪京煙  
 酒談經師想

今春七情款  
 心脾傾揚  
 以虎生  
 可入物且意  
 為養得固即生  
 而子不謂已為  
 江漢地持亦不遠  
 以余不付則噴  
 噴亦未名注相  
 不謂曾強通  
 亦不憚則如也  
 竟不負言矣字  
 來不謂亦噴  
 之亦其亦事必  
 莫不及吐為空  
 指余疾不輕  
 吾高宮屬余  
 則未亦吐  
 中及上某足  
 歌注江特必  
 以逢其志命  
 老心持胡  
 日久而則  
 以不亦而  
 對才未鳴呼  
 噴為人志甚  
 于事情曾  
 以志亦解所  
 故本跡進仁  
 如歷年其為  
 不求名外亦  
 解惟義是格  
 記為己之增  
 實此素在感  
 至微舉一益  
 稱本根死守  
 與繁公實  
 呼士人義烈  
 似噴馬牙  
 應坊備蒲  
 柳末靈鳴  
 豈淡成望引  
 以餘精棄王  
 尚鑒

西仙友  
 (是蘇學之)

蔡慶本忠信文 (原文を活字化)

維享保庚戌秋八月晦夜。若林進居。與諸友誦贊而茶於屋。不忠信之靈。炷香置拜日。  
 賢何遠隔矣而逝。嗚呼哀哉。昔者賢遊於網架先生之門。未幾先生易賢。則又不都來就平余而學。  
 與同視瞻。互執薪衣者。幾九年矣。夏不罵。冬不近爐。嚴凝難乏。合日而食者時有之。賢不少屈。  
 益趨益助。而余亦依矣。嘗朝月夕。相與論茶暖酒。騰語論興。悲今傷古。憤歎慷慨。心跡傾鳴。  
 相實以死生。其後以母倒無人憐。且美醫以為難。雖固非其志。而有不得已焉者。然江漢地接而不遠。  
 是以余不往則賢來。賢不來則余往。相逢不懼。而書疏通問亦曠。則相抱相實。不異昔日矣。  
 比年來余羸疾。賢要之不置。每致手書必莫不及此焉。竊謂。余疾不輕。招賢居萬宮。屬余後事。  
 則亦無遺恨矣。而去秋欲往不果。今春又未果。及茲秋往江北。將必訪賢以達樂志。  
 而董堂老心憐聞之切。不忍日久而間疏。故又復不果而還家。則計畫矣。嗚呼哀哉。賢之為人也。  
 忠直而迂于事情。質朴淳厚。以厭外飾。所謂剛毅不訥近仁者。蓋如此乎。其為學也。不求名利。不事  
 文辭。惟義是務。所謂為己之學者。蓋如此乎。若夫感慨激發。筆至而悲歌。不顧死生利害之氣象。  
 則莫有古人繼烈之風矣。嗚呼已矣。有肖似于賢者乎。余未之見矣。是余之所以感歎而不能禁也。  
 北風蕭蕭。望柩夜啟。嗚呼哀哉。與諸友置拜。陳情以醉。情爽有如尚賢。